

堀 芳孝先生を偲んで

渡辺 定路

今、サクラがすんで万縁目にしむこの季節。堀先生と共に歩いたあの山、この谷のことが、鮮明に思い浮かんで来ますが、逝かれてはや一年。アルバムは、もうページを増すことのない事がとても残念に思えてなりません。

足羽山の博物館と言うと堀先生の面影が目前に浮かんできます。あれは先生が精魂を傾けて設立されたもので、その内容の充実していること、運営方針のはっきりしていること等、地方の博物館としては、全国屈指の立派な博物館であることは周知のことと、全国からの見学見が跡を断たないことを考えても、先生の卓見の程がうかがえます。

私が堀先生にお教えを受けるようになったのは、昭和30年、先生の光陽中学校長時代、博物館主催の採集会でお会いしたのがきっかけで、その後採集会にはよく出席し、標本の作り方から教えて頂いたものでした。当時の採集会には、先生は地下足袋にゲートル、おにぎりを携え、中折帽子といういでたちで、山野を健脚でもって跋歩され、植物の名について名前をお尋ねすると、「名前がよく変わるからかなわん。」と言われながら、昔はこうであったが今は変わっているかも知れないよとよくいわれました。

昭和33年に先生から、どこか近くの山を徹底的に調べてみてはとのアドバイスを受け、昭和34年、武生市の鬼ヶ岳の flora をやることを心に決め、小生新米教員として職務に精出す一方、寸暇を見つけて山を廻り歩きました。当時は、今考えると不完全な標本や必要性の少ないものなどまで後生大事に博物館を持って参上。先生はご多忙な中、いやな顔もされずに懇切丁寧に同定して下さり、識別の方法なども微に入り細に亘ってお教え下さいました。

そのうちに先生から、植物分類地理をやるのなら、大学へ内地留学して1年みっちり学んではとの言葉があり、早速、金沢大学の正宗嚴敬教授に紹介状を書いて下さいました。

金大に出発の際には、特に新しい分類学をしっかり学び、身につけて来てほしいとの贔を頂きました。この金沢の1年間は、研究生活のあり方、学問に対する基本的な考え方の再認識などができる、ともすれば、毎日を時の流れのまま教科書中心に、知識の伝授にあけくれていた自分に一本の棹をさしてゆっくり考え直させてくれるゆとりを与えてくれたという事も含めて、大へん有意義な1年間であったと思われ、この機会を与えて下さった先生には、心から感謝をいたしているわけです。

先生は、実はあの細い体躯や、あの静かな物腰、控え目な態度からは、到底想像できないような純粋な、限りない研究愛、並大抵ではない精神力、辛抱強さ、根気の良さを合わせ持って居られた類稀な人格者であったと、今もしみじみと思い起こされます。

堀先生が採集されて新種となったものに、

- *Rubus horiyoshitakai* Koidzumi (マルバアワイチゴ)

- *Cirsium microscopicatum* Nakai var. *yechizenense* Kitamura (エチゼンアザミ)
- *Sasaella imdatensis* Koidzumi (サバエシノ)

などがあります。

マルバアワイチゴは1934年6月4日に勝山市壁倉で採集された標本に小泉源一博士が命名されたものであります（同年7月にも採集）が、その後堀先生も採集しておられず博物館にもこの標本はありません。1976年の6月中旬頃に富山大の鳴橋先生にマルバアワイチゴの type 標本の写真のコピーを頂き、モミジイチゴとの関係を調べたいので探してほしいと依頼されたので、昨年壁倉に2度行きそれらしきものを採集し鳴橋先生に見てもらいましたが、モミジイチゴの典型ではないが、ひょっとするとモミジイチゴの3倍体かも知れないとのこと、残念ながら再発見は出来ませんでした。

エチゼンアザミはアズマヤマアザミの変種として北村四郎博士が1937年に発表されたものであります。これはオハラメアザミに似たものであります但博物館の標本庫には入っていません。

この他、先生が採集されて東大や京大の標本庫にはあるが博物館の標本庫にないものに、

Chrysanthemum aphrodite Kitamura サンインギク

越中以西の日本海沿岸地方に分布。

Athyrium setuligerum Kurata トゲカラクサイヌワラビ

本州（伊豆・若狭・周防），四国、九州に分布。

などがあります。

これらの植物についても、1日も早くすっきりさせて、先生の御靈前にご報告いたしたい所存であります。

（武生高等学校）